メイドはいかが？

桂樹 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メイドはいかが？

【Ｎコード】
Ｎ３８５６Ｄ

【作者名】
桂樹　槐

【あらすじ】
会員制でイケメンだけのメイドカフェ。そんなところが本当にあるとしたら、どんなことになるんでしょうか？

プロローグ

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

会員制の屋敷が、郊外にでんと構えていた。
女人禁制と書かれた立札。
がしかし、この屋敷に入って行く、容姿端麗な女性を目撃したという人が何人かいる。
それもそのはず。
この屋敷には選りすぐりの美女たちがメイドとして働いているのだ。
何を隠そうこの屋敷は、イケメンだけの所謂メイドカフェなのだ！

―会員になりたい貴方へ―
いらっしゃいませまだ見ぬ会員様！
只今会員人数に2人ほどあきがございます。
つきましては、今回オーディションのような形をとらせていただきました。
既に会員となっている方は5名いらっしゃいます。
貴方様に新たなお仲間が見つかるかもしれませんよ。

＊応募までの流れ
1．まずは書類を送ってみましょう。
　パソコンのホームページに用紙がありますのでお手数ですが印刷してどうぞ。
2．書類選考に通った方にはこちらから連絡いたします。
　その後、日時を決め面接となります。
3．面接の内容は個々それぞれに違いますが、１５個程質問させていただきます。
4．最終審査（内容は秘密ですｖ）

簡単に言うとこれだけですが、何しろこちらはイケメン限定でございます。
容姿だけではなく、性格まで見させていただきます。
会員は限られているため、人数制限がございます。

今のところは2人なので、2人決まりましたら連絡無しに打ち切らせていただきます。
その場合は、
どうぞまたの機会に――――

第一話

「最終審査って何なんだろう？」
身長１７２ｃｍ、顔良し、頭もそこそこ良い。
名前は神崎瑞樹（かんざわ みずき）。
「はぁ……それにしても姉さんもなんで応募するのかなぁ…」
しかも受かっちゃうし。
最終審査の後ろには〇付で秘密なんて書いてあるし。
胡散臭いの丸出しだとも思うんだけどな。
「いらっしゃいませ、会員様」
「…はぁ」
「審査合格おめでとうございます」
「え、でも、最終審査って…」
「えぇ、今日がその日です。一日お供をさせていただきます」
ペコリと頭を下げた“メイド”さん。
「咲葉（さきは）です。よろしくおねがいいたしますね」
「それが最終審査？」
「簡単にいえばそうです。
わたくしが今から決められた時間内精一杯あなたにお仕えいたします。
あなたはただ、そこにいてくださるだけでよいのです」
「え、」
「瑞樹様、ではどうぞこちらへ」
……なんだか大変なところへ来てしまったような気がする。

「え……っと、」

「はい？」
「こんな部屋で最終審査？」
「そうですね」
豪華な一室。
どう考えても俺の部屋の三倍はあるんじゃないかという広さ。
何故かあるグランドピアノ。白いやつ。
ティーセット……これはあれか？高そうなやつ、
ウェッジウッドとか、ロイヤルアルバートとか、エインズレイとか
……そういうやつ？
「これは……？」
「カップはロイヤルアルバートのレディ・アスコットです。
茶葉は普通にアールグレイですよ？
嫌いですか？」
「嫌いっていうか、言いにくいんだけど、俺ストレート飲めないんですよ。
ミルクティーにしないと、飲めないんです、恥ずかしながら」
「じゃあ、ミルクティーにしましょう」
「すいません」
グリーンで薔薇の模様が美しいカップを見つめながら、気が遠くなりそうだった。
金の使い方が違う。
「どうかしました？」
「うん？いや、別に……ここって時給はいいんですか？」
「敬語は要りませんよ。
それについてはお答えできません」
「ですよね」
にっこりと笑った咲葉さんは言い知れぬ威圧感があった。
「えっと……じゃあ、咲葉っていうのは本名？」
「それについてはお答えできません」
「そ、そうですか」

何を喋れば良いのか全く分からなくなった俺はとりあえず黙って紅茶を口にした。
「美味しい……」
「そうですか？
主の好みに合わせるのは毎回大変なんですけど……
私の好きな淹れ方が気に入ってもらえたなら嬉しいですわ」
「主とかは、やめてくれる？
まぁ……そういう設定なのかもしれないけど、
俺はとりあえず、まぁ…お友達？」
「お友達……？」
戸惑ったようなその表情に変な事を言ったのかとこちらも戸惑ったが、
そのあとふんわりと咲葉が微笑んだので、少しだけホッとした。
ピンポンッと軽快な機械音が鳴った。

『合格です』

機械的な声色でその言葉だけがどこからか流れて、切れた。
「合格……？」
「当屋敷の正式な会員として認められました」
「会員？」
「これからもよろしくお願いしますね、瑞樹様」
「は？」
「じゃあ、Ｎｏ．７の部屋へご案内いたします」
「なな？」
「あなたが七番目の会員様だからです。
こちらの屋敷ではお一人様に一部屋ずつお部屋が用意されているので。
あ、でも、まずはほかの会員様に会っていただかないと、ですよね！」

……大変なことになった、本当に、大変なことになった。

第二話

一応今決まっている会員様に会っていただきます。
咲葉がそう言って案内したところは、まるでタイムトリップしたのかと聞きたくなるような、
大きな大きな大広間だった。
そこには、八人のメイドさんとカッコいい男子が長い机についていた。
「なんじゃぁ…こりゃ……」
「他の会員様です！」
笑顔の咲葉。
笑顔の“他の会員様”。無表情の“他の会員様”のメイドさん…？
「Ｎｏ．７？」
「そう……らしいですね」
「いらっしゃい、だね」
中学生ぐらいの男の子がにっこりと笑った。
俺より年上の男の人が上座と思われるところの隣に座っている。
その次に俺と同じぐらいの男子。
次にさっき言った中学男子。それから、ハーフっぽい双子の美少年。
そして、一つ席が開いて、七、と提示された席の後ろに咲葉が立った。
「そこ？」
「はい」
「咲葉だ」「咲葉だ」
双子が喋った。
「知られて……？」
「咲葉は有名なんだ。気立てが良いって」
「ふぅん？」
目の前にいる咲葉は椅子を引きながら微笑んだ。

「あぁそうだ。俺は界南。Ｎｏ．２」
「俺は桐阿。Ｎｏ．３」
「僕は啓太。Ｎｏ．４、よろしくねお兄さん」
「僕祐真Ｎｏ．５」「僕祐深Ｎｏ．５」
「５が二人？」
「僕らは双子だから」「二人で一人なんだよ」
で、５がダブってるから６がなくなって、俺がいるわけか。
「えと、よろしくお願いします、瑞樹です」
「俺のメイドは美月っていうんだ」
「俺のは聖良」
「僕のは槙」
「僕のは茉里」「僕のは海理」
なんとなくわかった。
祐真と祐深兄弟は、祐真が先に喋って、祐深があとから喋るみたいだ。
ていうか本当にそっくりだなこの兄弟。
どこかに違いとかつければいいのに……。
いやいやちょっと待てよ、頭がこんがらがていた。
ご丁寧に皆さん一気に説明して下さるから…。
「えっと…美月さんが、界南さんのメイドさんで、
聖良さんが桐阿さんで、槙さんが啓太さんで、
あ、…茉里さん海里さんも双子ですか？」
「「その通りです」」
あ、この二人は同時に話しかけたら同時に返事するのね。
「瑞樹様、こちらへどうぞ」
「へ？あ、あ……はい」
ぷっ、と界南さんが笑った。
「……？」
「敬語キャラ、珍しいねぇ」
「敬語キャラ？俺のことですか？」

「そうそう。お兄さん自分のメイドに敬語を使うんだね」
メイドって言っても、

俺は、自ら望んでそう、メイドになってもらったわけじゃないのに

第三話

ところで、と切り出されて、俺はいまＮｏ．７の部屋にいる。
なんだかな、扉がでかいよ！？
あ、切り出したのは界南さん。

『一回は自分の部屋を見ておいたほうがいいと思うぞ』

うーん……見たほうがいい、って…。
見るだけでいいのかな？
「…開けないんですか？」
「心の準備中なんです！
あ、ところでねぇ、敬語キャラって…珍しいの？」
「そうですねぇ……ここでは十分珍しいですね。
ここでは大広間でも敬語を使う方はあまりいませんから」
「そうなんですか？」
「ほら、また。
そうなんですよ。上下関係とかも、ないですから」
にこにこと言われると、こちらもグッと言葉に詰まってしまう。
上下関係がないっていうのはとても変な感じだった。
「で、まだ開けないんですか？」
「……そろそろ開けようかとは思うんだけど、その…」
「言っときますけど、広いですよ」
「だよね」
よし！
意気込んで頬を叩き、扉に手をかけた。
「ていうか扉おもっ！」
「慣れますよ」
「そういうものですか」

「そういうものなんです」
そういうものなのかと無理やり納得して、俺は扉を開けた。
広がったのは綺麗にアンティークで統一されたやっぱり広い部屋。
「すごっ…」
「ここが、あなたが会員であればいつでも出入り自由な部屋です」
「出入り……自由」
「館にいらしたら、まずこの部屋においでください。
それから、私のことを呼んでくださいね、あそこにインターフォンがありますから。」
「うん」
咲葉はにっこりと笑った。
「……ここのメイドさんは皆、この屋敷にいる時以外はちゃんと生活してるんだよね？」
「まぁ……当たり前に」
「じゃあ、咲葉は？」
「私……ですか」
「学校通ってるの？…とか」
「さぁ、どうでしょう」
「そういうのは、教えたらだめだってことになってるの？」
「…そういうことです」
ふぅん、と俺は頷いた。
「俺の姉ちゃんがさ、勝手に応募したんだ」
「だから選ばれたんですよ」
「は？」
「自分の意思で応募していないからこそ、選ばれたんです。
文字が、女の人のものでしたから。
選考したのは私です。私たちは、自分の主となる人を自分で選べるんです。
だから……いつか絶対に会えますよ、外の世界で」
「ふぅん？」

「信じてませんね？」
「し……んじるよ、うん」
半信半疑と言えば半信半疑だったけれど、なんとなくそんな気がした。

第四話

家路についたのは最終審査に向ってから五時間後。
一時間は最終審査、その後一時間は大広間での語らい。
後の三時間は……なにしてたっけ？

咲葉と喋ってた。

それだけで、三時間も時間がつぶれてしまったのか？
すごい、すごすぎるぞ自分！
「ただいまー…」
「おっかえり！どうだった？可愛い子いた？」
「そりゃあね……」
「かっこいい人は？」
「いたよ。当り前じゃない、姉ちゃんそれ目当てで応募したんだから」
「そうともいうわねー」
「だから…」
姉ちゃんは面白そうに笑って、俺の手からカバンをもぎ取った。

「……なに」
「何か入ってないのかと思って」
「何が」
「写真とか？」
「誰の」
「メイドさん！」
「あるわけないだろうがっ！」
とりあえずカバンを取り返してから、自分の部屋へと駆け上がる。
がすんとベットにカバンを投げつけて、椅子に乱暴に座る。
ふぅ、とため息をつくと、咲葉の言葉が頭によみがえった。

『会えますよ』

……会えますよ、か。
「どこだっていうのかな……」
で、何で俺はこんなにも心待ちにしているようなセリフが出てきちゃうのかな？
「変なの……」
「みずきぃー！？」
「何？」
「明日学校あったっけ？」
「昼前から」
「じゃ、いっか」
「何？」
「ううん、明日早く起きたくないからねぇ……。
今から飲みだから！そこんところよろしくね！」
「はいはい、刺激しないようにしておきますよ」
ぷーっと姉ちゃんは頬を膨らせて、そんなこと言わなくてもいいじゃない、と呟いた。
酒癖が悪いのが分かっているのか、それ以上は文句は言わず、俺の

部屋を出て行く。
明日は煩い奴等に会わなくちゃいけない。
気力を溜めるために眠ることにしようかな……

第五話

「みっずきぃ〜！！」

はぁ…、ため息をひとつついて、体を右へスライドさせる。
後ろで方向を変える音がしたと同時に、勢いよく振り返った。
そして、振り向きざまに後ろから抱きついてこようとしていた獣に肘をめり込ませる。

「ふぐおぉっ！？」
「俺の勝ちー！」
「死ぬ、死ぬからね俺！鳩尾にヒットしたから！！」
「お前なら死なない。大丈夫だよ」
「どこが？なにが！？どういう理由で！！？」
「……わかんない」
「可愛く言うな！！」

小首を傾げて見せる仕草は気に入らなかったらしい。

「で、誰だっけ？」
「ひどいっ！」
「嘘だって。お前のスキンシップは激しすぎるんだよ、慧（ケイ）」
「だって俺瑞樹のこと好きなんだもんっ！」
「えっ……俺にそっちの気はないよ！？」
「はぁ！？俺にもないよ！そうでなくて、そうでなくてっ！」
「また女関係？」

慧の顔には見事に“彼女が欲しい！”と太字で書いてある。
そんなに欲しいかな、彼女。

「瑞樹がいると女の子が寄ってくるからね！」
「最っ低！！」
「あたかも彼氏の浮気が発覚した時の彼女のような口調で言うな！」
「でも、俺がいるとそんなに寄ってくるの？」
「……周りを見てみろ、ここだけ、ちょっと色が違うぞ」

キョロキョロとあたりを見回してみても、慧の言ったことがよくわからない。

「それでだ！」
「あれ、さっきの話は？」
「それでだ、来週何があるか知ってるか？」
「オープンキャンパス？」
「そうそれ！この学校を狙っている女の子（と男子）が来るんだよ？俺たち大学一年生、相手は（ほぼ）高校三年生、大丈夫！！」
「何が」

輝くような笑顔で親指立てながら言われたって、俺にはどうしようもないんだけど…。
笑顔が眩しいまま、慧は俺の肩を叩いた。

「俺と一緒に回ろうぜ！」「ヤダ」

自分でもびっくりするようなぐらい早く返事を返すと、慧がマンガみたいに面白くこけた。
大丈夫かな、頭。大丈夫じゃないかな、頭もう駄目だろうな。

「何でよ」
「だって俺お前嫌いだもん」

「えっ……」

瞬時に泣きそうな顔になる慧。
ちょっとやりすぎたかな…と思ったけど楽しいからまぁいっか。

「本当…？」
「本当……や、ゴメン、嘘。言い過ぎた」
「一緒に回ってくれよ！」
「……まぁ、いいけど……でも」
「う？」
「お前の仕事はきちんとやれ。あと一週間で本番なんだからな！
当日は仕事無い変わりに準備を請け負ったんだから、きちんとやれ！」

コクコク頷く慧の頬に、俺はビシッと人差し指を突き刺し言い放った。

「今から五日後までにお前に充てられた仕事をやりきらなかったら、
約束はチャラだからな、チャラ！絶対にお前とは回らないからな！わかったな！？」
「はいっ！」
「じゃぁほら、今から走って行ってこい！」

面白いぐらい素直に慧は回れ右をして学部棟へ帰って行った。

第六話

オープンキャンパスで俺たちが何をするのかというと、
文学部らしく日本の古くからある怪談を調べてお化け屋敷だ。
で、俺は手先が器用だから看板とか壁の絵を担当させられていた。
慧は大雑把なのでダンボールで部屋を仕切る作業。
どんな変なのが出来上がるのか楽しみだ。

「咲葉はさ、女の子大好きな男子ってどう思う？」

咲葉が入れてくれたミルクティーを飲みながら、ふとした疑問をぶつけてみる。

「え？……う～ん…、私は、あんまり…得意ではないですね」
「そう。じゃ、無理だな」
「何がですか？」
「こっちの話」

慧は咲葉に会ったとしても受け入れられはしないということか。
そもそも、あいつは性格的に可愛い男子止まりだった気がする……
昔から。

「俺の周りにね、結構うるさい男子がいるんだ。賑やかで」
「楽しそうですね」
「楽しい時は楽しいよ、でも、うるさいからさ」

咲葉はくすくす笑った。
ズッ…、と紅茶を音をたてて飲んでみた。
咲葉が淹れる紅茶は、俺の好みにぴったりと合っていた。

「不思議だ…」
「はい？」
「いや…こういう仕事って、訓練みたいなものはある？」
「はい一応。三ヶ月ぐらい研修期間がありますね、普通は」
「普通は？」

含みのあるその言葉に思わず訊き返すと、苦笑が返ってきた。

「私は一ヶ月だけだったもので…」
「おぉ？」
「最高で六ヶ月かかった人もいると聞いています」
「じゃ、咲葉は最短だったの？」
「そうなります…ね」
「優秀だったんだ」

微笑んでみせると、咲葉は困ったように微笑んだ。
恥ずかしいのだろうか？多分違うだろうな。
この話題はもうしないほうがいいだろうと思い、無理矢理話題を変えようとした。

「そういえばＮｏ．１って誰？」
「え？…私もよくは知らないんですけど……」
「そうなんだ？」
「一度しか会ったことがないんです。ここに面接に来た時に。
笑顔の可愛らしい双子のような方でした。
ここには来ているらしいですが、大広間には顔を出さないんです」
「今の俺みたいに」
「そういうことです」

でもなぁ……出にくいんだもんなぁ…あそこの空間。
紅茶を啜りながらそんなことを考えていると、咲葉が小さく呟いた。
俺にはそれが聞き取れなくて、聞き返す。けれど、曖昧に笑って答えてくれなかった。

何故か俺はもっと咲葉と喋っていたくなった。

第七話

瑞樹様が帰ってから、私は恥ずかしくなってその場にしゃがみこんだ。
なんであんな、大広間へなんか行かなくてもいいなんて、言ってしまいそうになったんだろう。
なんであんな……

「咲葉？」
「璃琉羽（るりは）…さん……」
「敬語じゃなくても良いのに。私のほうが、年下なんだから」
「いいえ……

だって貴方はオーナーの妹なのですから」

「できたーーーー！！」
「出来たんだ？おめでとう」

それから三日後、慧がウキウキしながらカフェまで走ってきて、俺にそう言った。

「女子にちゃんと見てもらったの？」
「泣いて喜んでたさ！」
「それ、がっかりしてたの間違いじゃないのか」
「いやそんな……」
「見に行こうか」
「驚くよ！」
「別の意味でな」

慧はアハハと笑って、俺の後についてきた。

部屋の前に飾られている、俺と女子との合作。
ドアを一歩くぐると……そこには、見事な迷路が。

「お前これ作ったの…？」
「何というかね、作ったには作ったんだけど、穴が……」
「沢山開いてる、と」

穴というか、隙間が沢山あいているその作品は、慧にしては見事な出来栄えだった。
女子が泣いて喜んだというのは、あながち間違いではないのかもしれない。

「頑張っちゃったからね！」
「頑張ったなー……
女子が絡むと違うというかなんというか」
「下心とか言いたいのか！？」
「違うの？」
「いぃや違わないとも！」
「威張って言うことじゃないだろう……」

この隙間は、使いようによっては良い効果になるだろう。

「よくやったね」
「うん、俺よくやった！」

ガッツポーズをして喜ぶ慧。
これで俺は、学祭の自由を失ったわけだ。

第八話

学祭までもう秒読み。
浮かれきって頭が沸騰している奴が、何人もいる。

頼むから、俺の自由を返してくれ！
と言いたいけれど、まぁ自分の言ったことだ。落とし前はきちんとつけるさ。

「けーいー……女の子同士の買い物じゃないんだからさ～」
「どっちが似合うと思う？」
「いやいやいや、どっちが似合う、じゃないから。どっちでもいいだろ」
「イヤッ！そんなこと言わないで！！」
「何キャラだよ……」

二，三枚の服をぎゅっと握りしめて、ウルウルとした瞳でこっちを見てくる慧。
女の子だったら可愛いのになぁ……
いやいやいや、慧は男の子漢（おとこ）の子……

「本当はさ、俺……」
「ん？」
「女装したほうが似合うと思うんだ」
「あ、なんだ自覚があっt……なんでもない」
「でもさ、それじゃ意味ないでしょ？」
「言葉言葉、女の子みたいになってる、女の子みたい！」

慧は決めたのか、服を持ってレジへと向かった。

「あ、コレいい」

俺も便乗してレジへと商品を持って並ぶ。
慧は、はぁ、とため息をついて、俺のほうを向いた。

「だからね、瑞樹に一緒にいてほしいんだよ」

慧からしては、ものすごく切羽詰まった問題だったわけか。

「一緒に回らないなんて言ってないよ。
俺から先に言い出したんだ。ちゃんと、当日は回ってやるって」
「サンキュッ！」

はぁ、何だかなぁ……
こう……撫でたくなるような可愛さがあるんだけどな、慧の笑顔は。
女の子は可愛いやつよりもカッコいいやつのほうが好きなのかなぁ
…？

「で、どうするの。当日いくら当番がないとはいえ、何かやらされ
るだろう」
「多分……どうにかなるでしょう！」

大丈夫かなぁ……

第九話

とうとう学祭当日。
俺の前は一種の地獄絵図のようだった。

「いやだーー！！！」
「絶対似合うから、絶対似合うからっ！」
「似合いたくないんだってば！」

そりゃまぁ確かに似合いたくはないだろう。
いやでも、裏切りのような感じもあるけれど、俺もちょっと…いやかなり似合うと思う。
俺は腕組みをして息を吐いた。

「俺この日のためにこの服買ったのに！」
「学祭終わってから着れば良いでしょうが！」
「そんなぁ！……瑞樹ぃ…」
「や、ごめん、助けらんない」

白いひざ丈のふんわりしたワンピースに、ふんわりした薄茶のウェーブのウィッグ。

「慧！装着だ！！」
「アイサーッ！て何言わせんだ！」
「今だ、いけーっ！」
「「「よしきたぁぁぁぁぁ！！！」」」
「ギィヤァァァァァァァ！！！！！？」

三人の女子に抑え込まれた慧は、見事な手さばきで身ぐるみをはが

される。
この女子たちは慧の下着姿を何とも思わないらしい。素晴らしい乙女だ。

「つえー……」
「ふぅ」
「できたー」
「ホラやっぱり可愛いっ！」

いい仕事をした後のような輝いた顔をして、女子たちは流れてもいない額の汗を拭った。
いや、でも本当にいい仕事してるよ！可愛く仕上がってるもんな～……

「どう思う？神崎」
「いいよ、い～ぃ仕事してる」
「可愛いでしょ？」
「土台から可愛いからね」
「いやだぁ～」

スカートを少しつまんで、足元を見ながら眉間にしわを寄せた慧は、そんなことを呟いた。

「あれ、でもコンセプト的には和服のほうがいいんじゃないの？」
「そうも思ったんだけど…和服じゃ流石に、着せられないし、脱ぎにくいし」
「ずれてるけど、いいの？」
「うん。あのね、外国の女の子が入り込んじゃう、って設定にしたから」
「なるほど」

「それなら違和感無いでしょう？」
じゃ、慧は迷い込む外国の少女、なわけだ。
「瑞樹ぃ…」
「ん？」
「一緒に回ってくれる？」
「……いい、けど」
「並んだらカップルに見えるわねー…」
「そうねそうね」
「仲睦まじいわねぇ」
俺と慧は互いに見つめあって、なるほどと頷いた。
可愛いかもしれない。
「じゃ、行こうか」
「はい」
「様になっていてよ！」
女子三人組は笑顔で俺たちに手を振って、部屋から追い出した。
写真を撮っていたからそれをチラシにでもして配る算段なのだろう。
「思いっきり宣伝して来いってことか」
「女の子がぁ……」
「今は慧が女の子だからね、寄って来ようがないよね」
うん…と慧は少しうつむいた。
先ほどから振り返るのは男性ばっかりだ。
いや、でも本当に可愛いんだけどね。男子だとは思えないくらいには。

「あ、女の子集団発見！」
「え、行くの？」
「勧誘勧誘！レッツラゴー！」

少し高めのパンプスを履いて走る慧の後ろ姿を見ながら、
慣れてるなぁ、と思わず感心してしまった。
実は女装したことがあるんじゃないだろうか？

「そこの子ーっ！」

手をぶんぶん振って、慧は一目散に走って行く。
四，五人の女子の集まりは、くるりと慧を振り返った。

「……あれ？」

第十話

「ちょ、おい慧！」

待て、と叫んでも慧は止まることなく走って行く。

「ね、一緒に回らない？」

ちょ、慧慧！何いきなり誘ってんの！

声にならない声を出しながら、俺は慧の頭をガシッと掴んだ。

身長が低めの慧は、腕が俺に届かなくてぶんぶんと振り回している。

「ごめんねー、吃驚したでしょ？」

「いいいいえっ！」

「は？」

思わず訊き返す。

「大丈夫ですっ！」

「ほら、瑞樹はすごい威力だろ？」

「何のこと？」

小声で訊いてくる慧の言葉に同じく小声で返す。

「わ、私、紀原美束（きのはらみつか）です！」

「私、九十九美海（つくもみみ）です！」

「赤佐木真理亜（あかさぎまりあ）ですっ！」

「「「よろしくおねがいしますっ！！」」」

俺は思わず頭を引っ張って慧を俺の前に出した。
痛いはずなのに慧は、差し出された三人の手をテへ、と笑いながら取っている。

「よ、よろしくね…？」

俺は曖昧に微笑んだ。

「一緒に回る？」
「「「はいっ！」」」

慧の言葉に三人は思い切り頷いた。

「あのぅ…」
「あ、咲……じゃ、なくて、えと…」
「咲坂琴葉です、初めまして」
「初めまして」

「ことちゃん、ずるい」
「美束、出てる、声に出てるっ」
「わっ…」

なんとなく慧が言いたかったことがわかったような気がして、曖昧に微笑んだ。

「初めまして大樟（おこのぎ）慧です、よろしくね！」
「…神崎瑞樹です…」

だからあのさ、合コンじゃないんだから……

なんでみんなかしこまって挨拶するのかな
まぁ……いいんだけど。

「じゃ、行こう！何か食べる？」

慧が歩き出すと、お祭りごとが好きなのだろう、咲葉以外の三人は目を輝かせた。

「不思議…」
「そうですね」
「女の子同士で歩いてるように見えるよね」
「はい。この前言っていた“女の子大好きな男の子”って、彼のことですよね？」
「そ、すぐにわかった？」

クスクス楽しそうに笑う咲葉。

「志望校？」
「はい」
「……これか」
「そうですよ。ふふ、吃驚しました？」

でも、どうしてなんだろう。
メイド服姿ではない、私服姿の咲葉の姿にちょっとだけドキドキしている。

「それにしても……咲葉の…咲坂さんの友達って、元気だね」
「ですよね。私も感服します」
「ところであのさ、やっぱり咲葉って呼ばないほうがいいよね？」
「そうですね。ですから、琴葉でいいですよ」

にっこり、咲葉は……琴葉は、同じ笑顔でそういった。

「瑞樹ー！！」
「あー？」
「俺らのクラス、行こうぜ！」
「あ？あぁ……良いけど、でも、いいの？」

は？と呟きながら首を傾げる慧。

「ノコノコと敵の本拠地に乗り込んでっても」
「……あ…」
「行ったら多分、……いや、まぁいっか。行こう」
「守ってくれる…？」
「そんな潤んだ瞳で見られても…。自分の身は自分で守らないとね」
「ちっ…行くぞ！」

紀原さんと九十九さんと赤佐木さんはどうやらやる気のようで、おー！と空に拳を突き上げている。
ふぅ、とため息をついて俺は琴葉に向き合った。

「どうする？」
「楽しそうですね」
「あんまり行きたくないんだよなぁ……俺が」
「どうして？」
「んー……」
「瑞樹ぃー！！早くー！！！！！」
「はぁ…」

どうやら行くしかないみたいだ。

俺が描いた絵なんて、本当は絶対に見たくなかったのにな……

第十一話

何でああもあの四人娘（うち一人男）は元気なんだ！
キャッキャ言いながら前を歩く四人を見ていると、怒りにも似た呆れのような感情が沸々と湧き上がる。

「元気すぎやしないか、ちょっと……」
「ですねぇ……」

結局向かっているのは俺たちのクラスの出し物であるお化け屋敷。
あるんだろうなぁ、あるんだろうなぁ……あの絵が…

「あっ、見えてきたー！」
「わ、でっかい絵がある……？」
「な、んかあれ……琴葉に似てない？」
「あんれー…」

だから嫌だったんだってば！
絵を描く時にちょぉっと“咲葉”をイメージして女の子書いたら、
自分でもびっくりするぐらいそっくりになっちゃって、
本当言ったら却下にしたかったのに、女子がすごく気に入っちゃって……

「穴があったら入りたい…」
「な、わけないか！
だって瑞樹さんは琴葉と今日はじめて会ったんだもん」
「そうだよねっ！」

あ、そうか。俺と琴葉以外ではそういうことになってるんだっけか。

いやでもそれって一番恥ずかしくないか？

「えっ…と……？」
「絵、お上手なんですね」
「あ……」
「あれ、私ですか？」
「ぅ…」
「ふふ、みんなには内緒、秘密ですね」

人差し指を唇にあてて、琴葉は微笑んだ。
綺麗な笑顔だったけど、恥ずかしさが増して、顔が赤くなりそうだった。
こらえたけど。

「瑞樹瑞樹瑞樹瑞樹！」
「だあっ！何、」
「意外と怖いみたいなんだけど……」
「ん、そりゃ力入れてるみたいだったし…。何、怖いわけ？」
「そそそそんなわけないだろう！」

でも、がっちり俺の腕をつかんでいる。

「女の子に見えるからねそれ、さ、入るんなら誰と入る？」
「誰と…？瑞「ヤだ」

エッ…と裏切られたような顔で呟く慧の首根っこをつかんで、女の子から離れる。

「よく考えろ。何のために女の子を捕まえた？」
「ハッ！……でもでも、俺が叫んじゃったら意味ないじゃん！」

「…大丈夫、ナイナイ！」
「みんなで入ろうよ！」
「動きづらいだろうが！」
「ぅ……じゃ、四人で入ろう！」

今まで一緒に行動していた三人の女の子を指さしてそういった。
いや、それはあの子たちに聞いてみなくちゃいけないわけで、
俺にそんな風に言われたら困っちゃうんだけどな。

「聞いてみれば？」
「一緒に入りませんか？」
「「いいですよー？」」

あれ、声が一個足んなかった。

「あの、私は……」

紀原さんが、おずおずと俺のほうを見上げた。
え、まさか…？

「瑞樹さんと行きたいです！」
「え？」
「あらま」

クスクス笑う琴葉とワタワタ慌てる俺（と、慧）。

「いいけど…」
「本当ですか！」
「じゃあ、私はご遠慮しましょうか」
「え？」

「あの、じゃ、二人で…」

行くんですか。マジですか。大変だぁ……

「じゃ、その…先に……行く？」

「はいっ！」

何でこんなにがっかりしてるんだろう。

変なの、おかしいなぁ……

「あ、神崎くんがきた…」

「女の子連れてる！」

ひそひそ喋ってるのかもしれないけど、聞こえてる聞こえてる。

「やるぞ！」

何を！？

「あのぉ……掴んだら、すいません…」

顔は掴む気満々の顔だね。ヤバいな、ちょっと怖い。

はぁ…と小さくため息が漏れた。

俺、こういうタイプのオンナノコって苦手なんだよなぁ……

はぁ……俺はもう一回ため息をついた。

第十二話

隣を歩く紀原さんはどうやら本気で怖がっているらしく、
いつひっついてこられるかこっちが（別の意味で）びくびくしてる。
さっきからヒソヒソとお化けたちが噂話してるんだけど、いいのか
お化けが必要以上に喋って。

「神崎が女ー」

誤解を招くような言いかたすなっ！

「女！？」

女じゃないから！

「大丈夫？」
「はひ…」

怖いかな？子供だましだと思うんだけど……
そんなことを考えているとどうやら出口にたどりついたようで、出
ようとしたら腕を引っ張られた。

「は！？」
「神崎、ちょっと」
「え、……紀原さん、先出てて」
「はい…」

紀原さんが扉を出たのを確かめて、俺は引っ張った奴に向きなおっ
た。

「何？」
「今の誰？引っかけたの！？」
「まぁ、慧が……」
「大樟（おこのぎ）が！？」
「今女の子だから」
「あ、そういや大樟の女装俺見てないんだって」
「もうすぐ入ってくると思うけど？」
「楽しみー！……じゃなくて、あの子狙い？」
「違うとだけ言っておこうか」

そうか、とそいつはまじめに考え込んだ。え？一目惚れ？年下に？

「もういい？」
「ん、頑張れ！」
「それは俺のセリフだから、頑張れ」
「頑張るサァ」

クラスの奴等は片腕を突き上げ、中へと入っていく。
次の瞬間、うわっ、と中から歓声が上がった。
お化け役の奴等があんな風に一喜一憂していものか……。

「あの…」
「え？あぁ、ごめんね紀原さん、どうかした？」
「あ、いえ…その……」

もじもじと手を動かす紀原さんを見ながら、少し肩をすくめた。
悪いけど、苦手なんだよなこういうタイプの女の子って…。
さっきもそうだたけれど、自分に自信があるのかしら？？

「私、その、瑞樹さんのことが…」
チラリ、と意味ありげに向けられたその視線に、
思わずフラッとめまいのような症状を覚えた。
「好きです…」
「……ごめんね」
ニッコリ笑ってみせる。
紀原さんはびっくりしたような顔になった。
…その顔の意味がよくわからないのだけれども。
「俺、……は」
「好きな人でもいるんですか？」
「そうとも言えるし、そうじゃないとも言えるかな。
どっちにしても、紀原さんの思いにはこたえられないよ」
そうですか、と困ったように紀原さんが笑うと同時に、
俺の腰が鈍い悲鳴をあげた。
「ってぇ！！」
「うぇぇえん、瑞樹ぃ！」
「うっわ、なに泣いてるんだよ慧」
「みんなして俺のこといじめるんだ！」
「お化け屋敷だからだろ」
琴葉がクスクス笑いながら奥から出てきた。
「そんなに怖かったですか？」
「女の子二人ともっ、全然怖くなさそう、でっ」

「あー、ハイハイ、もう泣くな慧」
「うぇぇん、瑞樹ぃ！」
頭をよしよし言いながら撫でてやると、慧はますます擦り寄ってきた。
外見は女の子に見えなくもないとはいえ、やっぱり男子。
「慧、抱き心地悪いな…」
「……悪かったな」
慧は豪快にズビッと鼻を啜り、俺から離れた。
離れる瞬間に慧はボソッと俺に「フッたでしょ」と言った。
あぁぁ、こいつ女の子関係だけは鼻が効くんだから……

第十三話

紀原さんはごくごく普通に、何もなかったように振舞っていた。
しかしそんな紀原さんを見て、咲葉が一言

「美束(みつか)ちゃん元気なくなりましたね、なにかあったんですか？」

と言った。

「ん？……鋭いね。あった。けど、これは言っちゃいけないと思うから」

そう言ったら、わかりました、と咲葉は微笑んだ。
でも、咲葉のことだ。多分気付いているだろう。

「慧、いつまでひっついてる気？」
「だって…」
「あのさぁ…外見だけなんだからね？女の子なのは。
中身とか体つきは男なわけだから、中身まで女になりたいの？」
「でも…」
「それに、さっきからいろんな人が見てるんだって。
俺、男一人で女の子五人独占してるように周りからは見えてるんだと思うんだけ。」

咲葉をはじめ四人の女の子でさえ、俺のことを変な目で見てるし。
いや、俺だって自分が疑わしくてしょうがないんだけどね。
腕を振ってはみるものの、慧はびくともしない。
男の腕力だろうがこれは！！

「けーいー……」
「ぐすっ…次どこ行く…？」
「回るの！？……あ～…俺腹減った。ご飯食べに行こう！」
「じゃあカフェ？」
「あー…良い？」
「瑞樹“あー”って二回言ったよ」
「うるさいな…。慧、俺が最低な奴だとか言われたら、お前の女装写真ばら撒くからな」
「え゛」

冷たい瞳で見やると、慧はギクッとしたようにふるえた。

「冗談……じゃないよ？」
「まままままいいよ！とりあえずカフェテラス行こう！」
「いや、だから、俺の手を引っ張っても…聞いちゃいねぇ」

空いたほうの手で四人組を手招くと、くすくすと笑いながらついてきた。
お化け屋敷から慧が出てきてから、一回も手を離してないんだけど…本当、外見だけは女の子みたいなのにつないだ手は男の子だから困るっつーか…。

「何食べる？」

学校のカフェテリアの表にある看板を指さしながら、慧はにこやかに聞いた。
お昼時から少しはずれているせいか、
学祭で出店がいっぱいあるせいか、カフェテリアの中は結構好いていた。

「注文したらあとはセルフなんだ」
「飲み物とかは？」
「飲み放題。自分で淹れればお代わりし放題だよ！」

食べたい物が決まったのか、慧はやっと俺の手を離して中に入って行った。

「さ…き坂さんは？」
「琴葉でいいって言ったじゃないですか…」
「…琴葉は？」
「パスタか何かにしようかと…」
「紀原さんたちは？」
「「「決めました！」」」
「あ、そう…慧についていってごらん？教えてくれると思うから」
「「「はーいっ！」」」

何故こんなにも見事に返事が重なるものか。

「……決めた。蟹とトマトのパスタにしよう」
「飲み物なんにします？」
「んー…紅茶？」
「はいっ」
「琴葉は？」
「…海鮮グラタンにします」
「わかった。じゃあ頼んどくよ。飲み物は端っこにあるから。
使い方は近づけばすぐにわかると思うよ」
「はいっ」

咲葉はパタパタと飲み物のほうへ走って行った。
俺は注文スペースで自分のものと咲葉のものを頼む。

すぐに出来上がるからと言われ、脇に立って待っていると、
慧たちがこちらを見て何かを話している。

「出来たわよ～」
「あ、ありがとうございま……す」

おばちゃんの視線がどことなく熱い気がして、俺は少し戸惑った。
二つの皿を持って慧たちのほうへ向かおうとすると、
慧がこちらを指さして大笑いしている。
どうでもいいけど、周りの人が見てるよ？
声の太い女の子だなとか思われてるんじゃないのかな…

「さっきからさ…何見てるわけ？」
「待ってる姿が絵になるねって話してたんですけど…」
「隣で料理作ってたおばちゃんの瑞樹に対する視線がさぁ…」
「熱かった、と？……てさ、二人分席足りないんだけど」
「あ……」

あ、じゃねぇだろ！
取りあえず隣の四人席に食事を置く。

「あれ、席が埋まってるんですか？」
「琴葉ちゃん、どうする？」
「え？」
「二人で座ればいいんじゃないの？」
「ふぇ？」
「……」
「美束ちゃん？美海ちゃん？真理亜ちゃん？
……三人ともどうしたの？目が……怖いけど…」

両手に持ったコップを零さないように気をつけながら、
咲葉は一歩後ろへ後ずさった。

第十四話

咲葉は少し唸ったのち、俺のほうを見た。

「座らないんですか？」
「へ？…あぁ、さ…いやいや、琴葉がいなら座るけど」
「琴葉ぁぁぁぁぁあ！！？」
「え？慧？え？……あ！！」
「私が呼んでいいって言ったんです」
「じゃ、じゃあ俺も…」
「どうぞ」
「こ、琴葉…ちゃん」
「はい？」

慧は感激したように腕を突き上げた。

「あ、瑞樹さ…んは、紅茶、ミルクティーでよかったんですよね？」
「あぁ、ありがとう」
「なんで琴葉ちゃん瑞樹がストレート飲めないって知ってるの！？」
「さっき聞いたんですよ？」
「あ、そうか…」

さて、じゃあいただきます！
とすっかり仕切っている慧が言った。

ちらりと隣を見ると、かなり和んでいる様子。

こちらはといえば俺を含め女の子が四人（認めた様子）いるていうのに。
なんで瑞樹と琴葉ちゃんはあんなに楽しそうなんだ！

「あ、美味しい」
「それはよかったです」
（いつも思うけど好みの味にドストレートなんだよな…）
「瑞樹さ…ん？」
「……様って言いそうになってる？」

小さく俺が問うと、咲葉は申し訳なさそうに頷いた。
けれど俺だってなんら大差ない。
咲葉、ってすぐに言いそうになってしまうのだから。
ふと隣を見ると、口に運ぶスプーンが止まったままの慧と目があった。

「慧？」
「わぁ！」
「何？どうかした？」
「いや、二人が絵になるなと思って…」

言って恥ずかしくなったのか、慧は食べかけのご飯を一気に口に運び、噎せた。

「大丈夫？」
「んっ……んん゛！」
「あぁ…大丈夫なのね」

胸をどんどんと叩いて苦しがる慧を尻目にパスタを口に運んでいると、

慧が真っ赤になった顔で非難がましい目でこちらを睨む。
「だってさぁ！」
スプーンを使ってビシッと慧を指す。
「何がどうだって？」
「ゲホッ、絵になるって、言ってるの」
「あ、そぉ」
取りあえず、“様”発言は聞こえていなかったようなのでホッと胸をなでおろした。
内心喜んでいる自分がいることが悲しすぎる。
「写真でも撮りましょうか？」
「え？」
九十九さんがにっこり笑いながらカメラ片手に尋ねてきた。
俺に聞いてるのか咲葉に聞いてるのかわからないあたり怖い。
「いやいや、動画が良いんじゃないの？」
「…え！？」
赤佐木さんはハンディカムを片手にニヤリと笑う。
ていうか今どこから出しました？
「美海ちゃん、真理亜ちゃん、瑞樹さ…ん困ってるから」
あ、また“さ”で止まった。
どうしても“様”って言いそうになるみたいだ。

「別に、写真撮られるのは良いよ？
でもね、俺たちをとるなら、そっちの四人も撮るから」
「あ、じゃあ撮りましょう撮りましょう！」

パンッと両手を合わせて、九十九さんが嬉しそうに笑った。
こちらとしても女装した慧の写真を撮る機会を与えてくれたことにとりあえず感謝だ。

「じゃあまず、俺が撮るから。そっちのカメラ貸して？」
「はいっ！」
「で？どんな感じで撮るの？
わざわざカフェで撮るぐらいだし…」
「普通で！」
「あ、普通でいいの…」

パシャ、とフラッシュをたいて撮る。ふむ、良い手ごたえ。

「じゃ、次は俺のカメラで撮ります！」

まずは全員。そして次に慧のアップで撮る。

瑞樹ハ見事可愛ラシイ笑顔ノ慧ノ写真ヲ手ニ入レタ！

「いよし！」
「で？次は俺達？」
「あ、私の撮りたいタイミングで撮るから食べてて下さい！」
「美海ちゃん？」
「こここ琴ちゃん、アハハ、じゃ、とりあえず一枚…」

パシャ、と九十九さんは引き攣った顔で写真を撮った。
アレ？咲葉のキャラ立ちがよくわかんないんだけど…
でも、とりあえず、ということはやっぱり不意打ちをするってことなんだろうな。
小さく笑いながら紅茶を口に運んだ。その瞬間に、シャッター音。

「え？」
「紅茶を飲んでいる写真をありがとうございます」
「は？」
「大事にしますね！」
「ん？」
「ありがとうございます…」
「……」

紅茶を持った手がなんとなく恥ずかしくて、コップを置いた。

「私にも焼き増しして？」
「琴葉！？」

パンッと両手を鳴らして、咲葉は笑った。

「俺にもー！」
「慧！」
「早く食べて出よう？」
「いや、だから！」

はぁ、と仕方なくため息をつく。
空になった皿を見て、まだ残っているコップを見て、仕方なく口をつけた。

第十五話

「さて、どこに行こうか？」
「俺もう歩けない」
「瑞樹～…まだカフェ出て五分も経ってないよ」
「……演劇見ない？」
「は？」

壁に貼ってあるポスターを見ながら俺は言った。
題目は「ルシカの恋」

「え？恋モノ見たいの？」
「……女の子好きじゃないかなと思って」
「あ、座ってたいだけだったわけね」
「そうとも言うかな」

ちら、と女の子たち四人を見ると、うち三人は目を輝かせている。

「うちの大学の演劇部って賞を取ったりもしてるみたいだし、
上手いんじゃないかなと思って……どう？」
「見たいです！」

一番に答えたのは咲葉だった。
吃驚した顔でその他一同が咲葉に視線を集めると、
咲葉は恥ずかしそうに頬を染めて、俯いた。

「この大学を志望してる理由が……それなので…その……」
「私も、見たいです！」
「あ、私もー」

「じゃあ、行こう！」
紀原さんは小さく手を挙げただけでにっこり笑った。
ふむ、俺がフッてしまってからすっかり無口になってしまった。
どうしましょ…？

「紀原さん」
慧がニコニコ笑いながら話しかける。
紀原さんは小さくびっくりしながら、はい、と微笑んだ。

「気にしないほうが良いよ」
「え？」

慧はちらりと俺のほうを見ながら囁いた。
丸聞こえ、ということはわかているのだろう。
むしろ、わざと俺に聞こえるように話しているのかもしれない。

「瑞樹はね、いっつもあんななんだ。
人よりモテるくせにね、人より色恋沙汰に興味無いの。
でも……多分きっと…」

あ、フォローになってない！

「…瑞樹はね、美束ちゃんにはいなせないよ」
「え？」
「瑞樹、結構難しいよ？」
「…たとえば？」
「好き嫌いが激しい」

余計な御世話だこの野郎。

「物も、人もね」

パチッと可愛らしくウィンクした慧。
紀原さんも気づいたのだろう、カァッと顔が赤くなった。
そりゃそうだ。遠まわしに嫌われてる、と言ったようなものなのだから。
俺のイメージがかなり悪くなったような気がするんだけど…？

「だから多分…瑞樹が気に入る人は少ないんだ。
うじうじ気にしてもしょうがないことなんだよ、こればっかりはね」
「……それ、さりげなく失礼ですよね」
「俺はそういう人だよ。勿論、瑞樹限定でね！」

慧に向って走り出し、ど突き倒したい気持ちを懸命に抑えながら、紀原さんを見る。
と、紀原さんは出会ってすぐのように、とても元気に笑っていた。

第十六話

『ルシカの恋』
それは、平民の娘のルシカと、
身分を隠してパン屋で働いている王族のシェンナの恋物語。

「ありきたり」
「コラコラコラ！瑞樹が言い出したんでしょ！」
「ま、そうなんだけどさ」

振り返ると、咲葉が目を爛々（らんらん）と輝かせていた。
好きなわけだ、こういう話。

「あ、ルシカって松岡さんやるんだ」
「ほー…」
「ま、松岡さんって、松岡有希さん？
劇団にもスカウトされている、その、松岡さんですか！？」
「そうそう。同じ学部なんだ」
「何学部ですか！？」
「あれ、言ってなかったっけ？ぶ「文学部！！」
「慧…」

俺の前にガバッと立ちはだかって答えた慧に、心の底から呆れる。

「意外です」
「へ？」
「私、慧さんはともかく、」
「え？」

紀原さんの“慧さんはともかく”という言葉に慧は見事に反応した。
「瑞樹さんは理学部とか、工学部とか…とにかく、理系だと思ったんですけど…」
「あー……俺ね。
理系のほうが得意ではあったんだけど……」
「読書家だからね」
「慧！」
「劇の台本とか、書くんだよ！」
「えぇぇ！？」

“劇の台本”という言葉に、咲葉が目を輝かせた。
まったく、慧ったら余計なこと言いやがって…

「知らない？
この前定期公演で演(や)った“水の華”って劇、
瑞樹が書いたんだよ？松岡さんが気に入ってくれたんだよね」
「あー……うん…」
「わ、私見ました！」
「え？」
「一般公開もしてましたよね？
私、松岡さんが主役の天音(あまね)でしたよね！」
「……まぁ…うん」
「琴ちゃん、瑞樹さん逃げ腰になってるよ」
「ハッ！」

我にかえったような顔をして、咲葉は注意してくれた九十九さんの後ろに隠れた。
そこまでしなくてもいいのに。確かに、驚いたけど。

「今回のは、違うんですね」
「完成できなくて」
「完成してたら使ってもらえたかもしれないんですか？」
「んー…どうだろう。松岡は気に入ってくれてたけど」
「そうなんですか…」
「あ、そろそろ始まるよ？入ろうか」

全員を促して、会場に入る。
流石に有名なだけあって、前のほうの席はすべて埋まっていた。

「二階席に行こう！
あそこなら一番前もあいてるみたいだし」

慧が楽しそうに言った。
嬉しそうに前を歩く咲葉の腕を引いて、耳元に口を寄せる。

「出来たら読んでくれる？」
「え？…は、はいっ！」
「そっか。松岡にも、会わせてあげるよ。
たぶん、劇が終われば会えるはずだから」
「本当ですか…？」
「松岡、琴葉みたいなこ、好きだと思うよ？」

俺の言葉に、咲葉はほんのりと頬を染めて、嬉しそうに微笑(わら)った。

第十七話

『ルシカの恋』は、ありきたりだが素晴らしい話だった。

『俺は、俺は……』

『嘘つき！シェンナの嘘つき！』

松岡のルシカは、笑い、怒り、泣き、罵倒し……。

松岡ではない、“ルシカ”がそこにいたのだ。

『何故？もっと早くに言ってくれればよかったのに』

『ルシカ…』

『そうすれば…そうすれば、私、

貴方のことを諦めることが出来ていたかもしれないのに』

やっぱり、松岡の演技は、素晴らしい。

劇団からのスカウトだって、頷ける。

「咲葉？…じゃなかった、琴葉？」

「すいませ、その…」

「話しかけて、ごめん。ちゃんと見てあげてね」

涙目になった咲葉。

本当に演劇が好きなんだな、と、その姿から感じた。

『ねぇシェンナ、私は、

…どう足掻いても平民なの』

『でもルシカ！』

シェンナ役の……あれは誰だろう？
三年生か、四年生か…同級生か？

『俺は、君を愛している。それだけは間違いないんだ！』
『身分社会のこの時代に、愛なんて何の役にも立たない！
……悲しいけれど、平民は、貴族にはなれないわ！』
『でもルシカ！』
『もう、もうこれ以上ここにいないで！
私の傍から、いなくなって！』
なんて、響く声だろう…

「素晴らしかったですね！」
講堂を出て、一番最初に口を開いたのは赤佐木さんだった。
紀原さんと九十九さんと咲葉は、言葉も出ないようだった。
「あー…と、ちょっと待った。松岡ー！！」
「あ、神崎！」

ルシカの服装のまま講堂から出てきた松岡が、
楽しそうに手を振りながらこちらに近づいてくる。

「あはは慧、いい恰好じゃない！」
「似合う？」
「似合う似合う！ルシカの服着てみる？」
「うーん……」
「こぉら慧っ！一人で喋繰るな」
「松岡、紹介するよ。お前のファンの、咲坂琴葉」
「さ、咲坂、琴葉です…」
「それから、右から九十九さんに、紀原さんに、赤佐木さん」

四人はドギマギしながらお辞儀をした。
松岡は四人を順に見比べ、頷いた。

「私、琴葉ちゃん好みかも」
「だろうと思った」
「入学したら、入ってくれる？」
「も、勿論です…！」
「んふふ、楽しみねぇ…」

松岡が悪戯に笑った。
きっともう受かることは松岡の中では確定事項のはずだ。
けれど、何故か俺も、咲葉が落ちることはないように思えた。

「そういえば次回作は？まだなの？」
「あと少しだよ」
「書き終えたら一番に見せてよ！」
「残念、一番はもう予約済みなんだ。
だから、二番目か三番目の読者になってな」

「ちぇー…」

途中咲葉にウィンクすると、咲葉は嬉しそうに笑った。
うんうん、可愛いな。
しっかりした印象しかなかった咲葉が、
演劇の話が出てからは可愛い印象が強くなったように思う。

「そうだよな…女子高生だもんな…」
「神崎？」
「あいや！なんでもない…」
「ジョシコセイがなんとか…って？」
「ジョシコセイ？何それ？新種の魚？」
「別にそんなことは言ってない」

聞き間違えてくれたことは非常にありがたかったけれど、ジョシコセイって何だよ！
そんな魚いるんだったら見てみたいっての！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3856d/

メイドはいかが？

2010年10月10日03時32分発行